

1.2-5)。そのため、・・・全世界の人々が救いの宣教を聞いて信じ、信じて希望し、希望して愛するように、神の啓示とその伝達についての教義を述べる。」

神の啓示とは、本来的に御子を通してわたしたち人間と聖霊によって交わることに他ならないことを強調している。

1章 啓示とはその本質

「神は、その愛と英知によって、ご自分を啓示し、またご自分の意志の秘義（エフェソ 1.9 参照）を明らかにしようと望まれた。それによって、人々は受肉したみことば・キリストによって、聖霊において父に近づき、神性にあずかるもとなる（エフェソ 2.18; ペトロ二 1.4 参照）。・・・そのため救いの歴史において神によって行われた業は、教えとことばの意味を明らかに証明した。」（2 項）。

次に、イエス・キリストこそ、この啓示の頂点であり完成であると、聖書に基づいて宣言している。

「神は、幾度となく、色々な方法で、多くの預言者たちを通して語ったが、最後に、今度は、御子によってわたしたちに語った（ヘブライ 1.1-2 参照）」（4 項）。

次に、わたしたちのこの神の啓示の受け止め方について基本的な説明がなされている。

「啓示する神に対しては、『信仰の従順』（ローマ 16.26;1.5; コリント二 10.5-6 参照）を示さなければならない。つまり、人間は『啓示する神に対して、知性と意志とを全面的に奉獻』し、神から示さる啓示に対して自ら進んで同意し、自由に自分をすべて委ねるのである。」（5 項）。

2章 啓示の伝達について

まず、使徒たちが、福音の最初の伝達者であり、彼らの後継者である司教たちの教導職によって啓示は誤りなく伝達される（7 項）。次に、カトリック教会が、大切にしている聖伝とまた聖書との関係と教導職にいて説明されている。

「それゆえ、使徒的宣教は、靈感による書物の中で特別な方法で表現されているが、絶えざる継承によって世の終わりまで保たれねばならない。そこで、使徒たちは、自分たちが受けたものを伝えながら、信者たちが、口頭説教や書

簡で学んだ（テサロニケ二、2.15 参照）伝承に従い、そして自分たちが永久に一度伝えられた信仰のために闘うように（ユダ 3 参照）論している。・・・このようにして、教会は、その教義と生活と典礼とにおいて、自らのあるがままのすべてと、信ずることのすべてを永続させ、あらゆる世代に伝える。

この使徒たちから伝えられた聖伝は、教会において聖霊の助けによって進歩する。・・・要するに、教会は、自分に神のことばが成就するまで、時代の推移に伴って、絶えず神的真理の充満を目指して進むのである。・・・

また、この聖伝によって、聖書の諸書の完全な正典が教会に知らされ、その中で聖書そのものがより深く理解され、絶えず活力にあふれたものとされる。・・・したがって聖伝と聖書とは互いに固く結ばれ、互いに共通するものがある。なぜなら、どちらも同一の神的起源をもち、ある程度一体をとなり、同一の目的に向かっているからである。・・・

それで、聖伝と聖書と教会の教導職とは、神の極めて賢明な配慮によって、それぞれは、他のものから離れては成り立たず、全部が一緒に、そしておのおのが固有の仕方で、聖霊の働きの下に、救いに有効に寄与するように、互いに関連し、統合されていることは明らかである。」(8,9,10 項)。

3章 聖書のインスピレーションとその解釈について

まず、聖書の真の著者は、神ご自身であり、同時に諸聖書記者たちであるので、真理が誤りなく伝えられているというインスピレーションについての説明がなされている。

「尊き母なる教会は、旧約および新約の全体の書をそのすべての部分を含めて、使徒的信仰に基づき、聖なるもの、正典であるとしている。なぜならば、それらの書は、聖霊の靈感(インスピレーション)によって書かれ(ヨハネ 20.31; テモテ二、3.16; ペトロ二、1.19-21;3.15-16 参照)、神を作者とし、またそのようなものとして、教会に伝えられているからである。神は、聖書の作成にあたり、固有の能力と素質を備えた人間を選んで、彼らを使った。それは神が、彼ら内に、また彼らを通して行い、彼らは、神の望むことをすべて、また、それだけを、真の著者として書いたのである。・・・従って、聖書は、神がわれわれの救いのために聖なる書に記録されることを望んだ真理を固く、忠実に、誤りなく教えるものである。」(11 項)。

さらに、聖書の解釈について基本的な指針が説明されている。

「聖書解釈者は、神が何をわれわれに知らせようと望んだかをよく知るため

に、聖書作者が実際に何を意図しようとしたか、また彼らの言葉を通して何を示すのが神意であるかを念入りに研究しなければならない。・・・中でも『文学類型』を顧慮しなければならない。実際、種々の方法での歴史的な、あるいは詩的な書において、またその他の表現様式において、真理は違った方法で語られ、かつ表現されている。・・・聖書の原文の意味を正しく理解するためには、それが書かれたのと同じ霊の光の下に読まれ、解釈されねばならない。」(12項)。

ところで、教皇ベネディクト十六世は、その使徒的勸告『主のことば』(Verbum Domini) で、聖書解釈について次ようにまとめておられる。

「正しい聖書解釈は、教会の信仰の中で初めて可能です。・・・聖書解釈の第一の場は、教会生活です。・・・むしろ教会は、聖書の本性そのものが要求し、聖書がすこしずつ形成された場なのです。・・・『神の啓示に関する教義憲章』は、聖書の神的次元を顧慮に入れるために三つの根本的基準を示します。

- (一) 聖書全体の統一性を顧慮しながらテキストを解釈しなければなりません。現代では、これは正典的釈義と呼ばれます。
- (二) 教会全体の生きた聖伝を考慮しなければなりません。
- (三) 信仰の類比を考えなければなりません。」(29、34項) (「信仰の類比」とは、個々の信仰個条は、教会の客観的信仰の総体の光のもとで理解されるべきという教え)。

4章 旧約聖書について

旧約聖書の一貫したテーマは、救いの歴史である。

「旧約の歴史が定められたのは、主として、万物の贖い主キリストとメシア王国との到来を準備し、預言者に知らせ(ルカ 24.44; ヨハネ 5.39; ペトロ一、1.10 参照)、またいろいろな前兆をもって、それを示すためであった(コリント一、10.11 参照)。・・・これらの書は、不完全かつ一時的なことも含んでいるが、神の真の教育法を示している。」(15項)。さらに、聖アウグスティヌスの言葉に従って、旧約と新約の一貫性が強調されている。

「それで、旧新両聖書の靈感の与え主、作者である神は、新約は旧約の中に隠れ、旧約は新約の中で明らかにされるという具合に、賢明に計らった。」(16項)。

5章 新約聖書について

新約聖書と福音書との聖書全体における優越性が強調されている。

「神のことばは、すべて信じる者にとって救いのための神の能力であって（ローマ 1.16 参照）、新約の各書において優れた方法で示され、その力を発揮している。・・・

福音書が、すべての聖書の中で、新約聖書の中でさえも最もすぐれていることを誰も見落とすことはできない。それは、われわれの救い主・受肉したみことばの生涯と教えの主要な証拠だからである。」（17,18 項）。

6章 教会の生活における聖書の役割

「教会は、^{こんにち}今日も、今までと同じように、聖書と聖伝と共に自らの信仰の最高の基準と考えている。・・・それゆえに、教会の教えも、キリスト者の信仰そのものも、聖書によって養われ、規定される。・・・

ことばの奉仕も、すなわち、司牧的説教、教理教育、各種のキリスト教教育、この中で特別な地位を占める典礼における説教は、聖書のことばから、健全な栄養と聖なる活力を与えられる。」（24 項）。

第V章 世界と教会における信徒の使徒職

この章では、『信徒使徒職に関する教令』の解説を試みるが、小林司教の優れた解説（「信徒使徒職教令」の解説、『公会議解説叢書 4 光をおびる教会』114-202 頁参照）を^{おも}主に参考にしてまとめてみたい。早速、その解説の一部を、引用したいと思う。「いずれにしても、この種の問題が公会議公文書として取り扱われたことは、長い教会史を通じて画期的な出来事であり、しかもその意図するところが、全教会の姿勢の改革であることを正しく把握しながら、本文を深く読む必要がある。」（前掲書 129 頁）。

ところで、この教令の土台となっているのは、『教会憲章』の 31 項で述べられている信徒像である。「信徒とは、洗礼によってキリストと合体され、神の民に加えられ、自分たちの様式においてキリストの祭司職・預言職・王職にあずかる者となり、教会と世界の中で自分の本分に応じてキリストを信ずる民全体の使命を果たすキリスト者のことである。」